

# 営農情報

第98号 平成24年6月28日発行

大豆栽培情報(7月号)

福岡大城農業協同組合  
南筑後普及指導センター

## 1 ほ場づくり

- 麦わらが、播種された大豆種子付近に多量にあると、乾燥による発芽ムラを起こすことがあります。麦わらをすき込む際は、できるだけ均一に散らします。
- 最適な生育環境である、pH6.0~6.5の土壌づくりのため、耕起前に炭酸苦土石灰100kg/10aを散布します。
- 播種前に雑草が多い場合、ラウンドアップマックスロードもしくはバスタ液剤を、200倍希釈で散布します。
- 耕起後は、早めに播種を行います。耕起後に雨にあうと、しばらくほ場が乾かなかつたり、逆に晴天が続くと、乾燥で大豆が出芽しなかつたりします。

## 2 播種

- 種子消毒は、キヒゲンを種子10kg当り100g混ぜます。
- 播種は、7月上旬から開始します。最適期は7月10~15日です。天候を見て、集落内で一斉播種を行いましょう。
- 適期播(7月上中旬頃)の場合、播種量は3~4kg/10a、株間は20~30cmとします。早播きの場合や、播種量が多い場合は、倒伏する可能性が高くなります。
- 降雨により、遅播(7月下旬頃)になる場合は、生育量を確保するため、播種量は6~8kg/10a、株間は15~10cmとします。
- 播種深度は、3cmを基本とします。事前に雨が予測される場合はやや浅め、晴天が続くと予測される場合はやや深めとします。
- 降雨翌日の播種が可能な部分浅耕播種を実施しましょう。(特集参照)

## 3 雑草防除

使用時期	薬剤名	10a当り使用量	希釈水量
播種直後 ~発芽前 (雑草発生前)	クリアターン細粒剤F	4~5kg	—
	サターンバアロ粒剤	4~6kg	—
	クリアターン乳剤	500~800ml	100リットル
	サターンバアロ乳剤	600~800ml	100リットル

※土壌が乾燥している場合は、希釈水量を増やします。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!

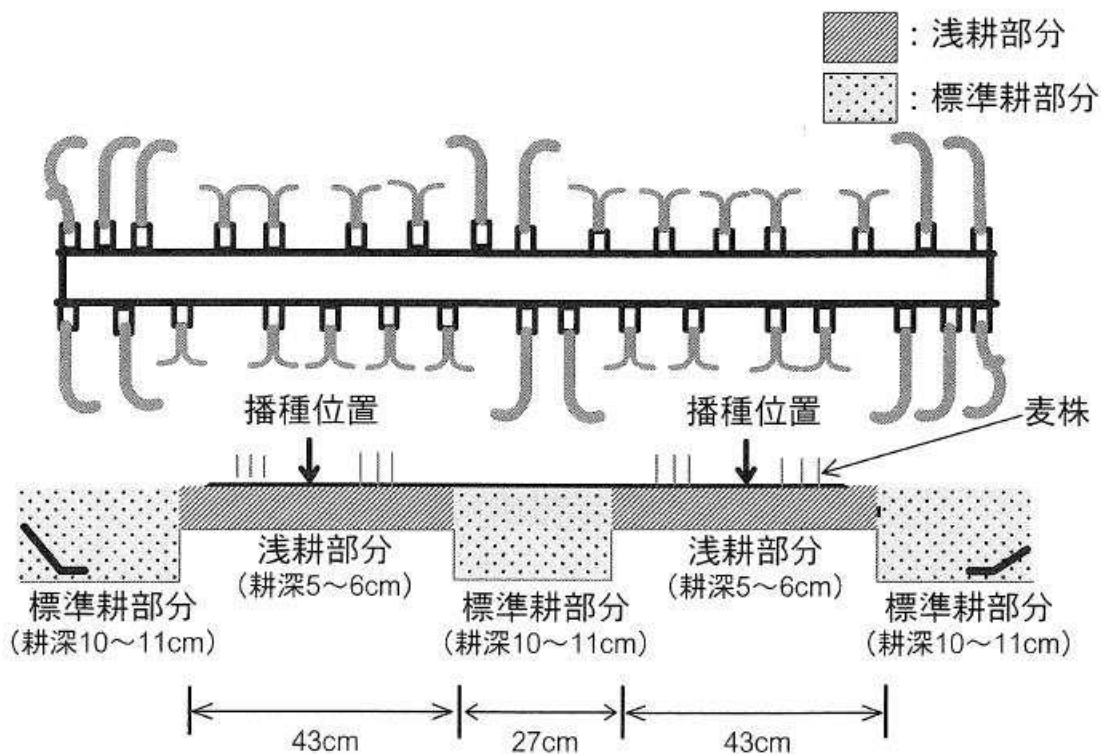
## ～特集・部分浅耕播種技術について～

播種前の耕起を省略し、一工程で播種すると、降雨翌日に播種作業が可能です。

部分浅耕播種技術は、雨の合間に播種が可能で、播種後の多雨、乾燥のどちらでも出芽が安定します。また、最下着莢高が高くなり、収穫ロスや汚損粒の低減にも有効です。

麦収穫後、麦うねをそのまま残し、爪を付け替えたロータリーで播種条を浅く、条間を標準の深さで耕起しながら播種します。

この技術を用いる場合、ロータリーの播種条にあたる部分の爪をはずし、かわりに培土用カルチ爪2枚を背中合わせで装着します。



### 部分浅耕播種用改造ロータリ (ロータリ幅140cmの例)

#### ※注意点

○前作の麦うね跡利用を前提としているので、大豆播種時には麦のうね幅と同じ幅のロータリーを使用します。

○大豆播種前に、必ずラウンドアップマックスロードやバスタ液剤の散布を行います。

○播種深度は、鋤床に着くよう5cm程度にします(やや深め)。

(詳細は、普及指導センターへお尋ねください。)